2008年度
第５回子ども学会議
（日本子ども学会　学術集会）報告

2008 年の 9 月 27 日（土）、28 日（日）の両日、第 5 回となる「子ども学会議（日本子ども学会　学術集会）」が奈良女子大学（奈良市）で開催されました。

テーマはいじめ。「“問題としての子ども”から、“存在としての子ども”へ　いじめ理解を深めるために」というタイトルで、子どものいじめをめぐって、講演やシンポジウムが行われました。

排除の論理から集団形成の論理へ

基調講演においては、大阪大学の鷲田清一総長により、社会の問題としてのいじめが語られました。鷲田総長は、いじめは子どもだけの問題ではないとして、「我々の社会が排除の論理に対抗する、集団形成の論理を作れていないこと」が、いじめを阻止できない根本的な理由の一つであると述べました。

また、大会推進委員長である浜田寿美男教授は、いじめの原因は複合的であるがゆえに、たとえ、いじめを行う子どもであっても、その存在をあえて善であるとした上で、なぜ子どもがいじめの悪に気づかずに、その構造の中にはまり込んでしまうのか、人間存在の地平から深く考察したいと、大会全体の方針を述べました。

閉塞感のある教室

初日のシンポジウムでは、奈良女子大学の麻生武教授がオーガナイザーとなり、学校現場で子どもたちと接する機会の多い先生方や研究者の方々と、現代の子どもたちの仲間関係のあり方を探っていきました。「空気を読む」という言葉に象徴されるように、周囲に気を使いながら、浮いたり、目だったりしないように手探りで仲間関係を作っていく現代の子どもたちの様子が紹介され、現代の教室に満ちているある種の息苦しさがいじめの土壌としてあることが指摘されました。

また、元公立中学校の教員であり、現在、奈良女子大学大学院研究員である土方由起子氏からは、仲良しグループ内での意識せざるいじめについても問題提起が行われました。いじめというと、規範意識をもたない子どもたちの悪行であるという理解がされることが多いのですが、実際には学校という場でさまざまな規範意識を内面化した子どもたちが、友だちがいないことは「悪」、みんなに合わせるのは「善」として、規範に従って仲間関係を築いている実態があります。あらゆる行為に対して、他者からの奨励や否認を受けながら、友だちを失わないよう想像以上に気を使い規範のハードルを高くする、そのことが時に仲良しグループ内でのいじめを生むことになるというのです。

いじめの再定義の難しさ

２日目のシンポジウムでは、初日の現場の様子を受けながら、いじめの再定義が行われました。武蔵野美術大学の伊東毅教授は、教室でいじめが行われていることを、教師だけではなく、クラスメートでさえも気づいていないというケースが増えていることを指摘し、現代のいじめが隠蔽されやすく、見えにくくなっていることを報告しました。

筑波大学の土井隆義教授は、現代のいじめが、「いじり」と呼ばれるように、いじめと遊びの境界のあいまいなものであり、フラット化した人間関係を維持するための手段に変質しているのではないか、そのために特定のいじめっ子がいなくても、つねに教室にいじめ的な雰囲気が遍在するといういじめの構造を分析して述べました。

多様性や個性が重んじられる時代となって、具体的な自己評価を他者からの承認に依存する子どもたちが、いじめをフックにして繋がりあおうとしているという刺激的な意見も述べられました。

明治大学の内藤朝雄准教授は、教室の閉塞性を、何よりも大きないじめの原因として捉え、中間集団の息苦しさから抜け出すことのできる装置を社会が用意することが、いじめ解決への近道であると訴えました。

大人はいじめの残酷さを再認識すべき

今回の特別講演は、愛知県西尾市いじめ相談員である大河内祥晴さんにお願いしました。相談を受けた子どもの声を紹介してもらうとともに、ご自身の辛い体験である、息子さんのいじめ自殺の話もしていただきました。いじめはいじめられている子どもにとっては大変残酷なものであり、私たちの社会がその解決のために本気で立ち向かっているとは思えない、という批判は重く受け止めることとなりました。また、大河内さんは被害にあっている子どもだけではなく、いじめを行っている子どもについても、その罪を糾弾するだけではなく、その子どものいじめ行為の背景にあるものをきちんと見て、サポートしていく必要が周囲の大人たちにあることを訴えました。

奈良女子大のシンボルであり、国の重要文化財でもある「奈良女子大学記念館」を２日間、満員の参加者が埋めました

プログラム

《9月27日（土）》

●日本子ども学会代表挨拶
小林　登（日本子ども学会代表・東京大学名誉教授）

●開会の言葉「いじめについて考える意義」
浜田寿美男（大会推進委員長／奈良女子大学教授）

●基調講演「いじめから見えてくるもの――社会の問題として」
鷲田清一（大阪大学学長）

●シンポジウムⅠ「いじめの背景となる子どもたちの仲間関係」
オーガナイザー：麻生　武（奈良女子大学教授）
パネリスト：内藤朝雄（明治大学准教授）、丸山まり子（安堵小学校教員）、池田曜子・土方由起子（奈良女子大学大学院研究員）

《9月28日（日）》

●特別講演「子どもたちの声から」
大河内祥晴（愛知県西尾市いじめ相談員）

●ミニセッション
伊東　毅（武蔵野美術大学教授）、東村知子（奈良女子大学助教）

●シンポジウムⅡ「いじめを再定義する」
オーガナイザー：浜田寿美男
パネリスト：伊東　毅、土井隆義（筑波大学教授）、内藤朝雄（明治大学准教授）